

韓・日兩國語의 現代敬語의 比較研究

盧 顯 松

日語日文學科

(1985. 4. 30 접수)

〈要 約〉

敬語法은 韓・日兩國語의 共通의 特質中의 一つとして 世界의 其他의 言語와 區別되는 一番 際立た 特徴である といふべきものである。本稿では 兩國語にある 敬語法의 特質을 分類面から 比較對照して 其의 類似點と 相異點을 考察して 見た。

その結果、韓国語では敬語という用語を広義の概念・狹義の概念の區別なく混用して場合によって表わすところが異なるように使う傾向が強いが、日本語では広義の概念・狹義の概念を區別して広義の概念を表わす場合には待遇表現という用語を使い、狹義の概念を表わす場合には敬語という用語を使うのが一般的であるのがわかり、分類体系において韓国語の敬語は尊待の對象を主とする体系であり、日本語の敬語は尊待の方法を主とする体系であるが、分類の内容面においては、主体敬語と尊敬語・客体敬語と謙讓語・聽者敬語と丁寧語という一対一の対応關係が成り立って基本体系面から兩國語の敬語は非常に類似するばかりでなく、共通性を示す点が多いのがわかる。

また、表現形式において韓国語の主体敬語と客体敬語は日本語の尊敬語と謙讓語に比して比較的簡単であるが、聽者敬語の場合は丁寧語より複雑な様相を示しており、漢語による敬意の体言は(いくつかの例外的なこともあるが)兩國語に同一の語彙が多く、用法面においても兩國語の敬語は類似点が多いが、韓国語に比して日本語のほうが相対的な性格が濃いのがわかる。

韓・日兩國語의 現代敬語 比較研究

盧 顯 松

日語日文學科

(1985. 4. 30 접수)

〈要 約〉

敬語法은 韓・日 兩國語의 共通特質中의 하나로서, 世界의 다른 言語와 區別되는 가장 뚜렷한 特徴이라 할만한 것이다。本稿에서는 兩國語가 갖는 敬語法의 特質을 分類面에서 比較對照하여 그 類似點과 相異點을 考察해 보았다。

그 結果, 韓国語의 경우는 敬語라는 用語를 廣義의 概念・狹義의 概念의 區別이 없이 混用하여 경우에 따라 나타내는 바가 다르게 使用하는 경향이 많으나, 日本語의 경우는 廣義의 概念과 狹義의 概念을 區別하여 廣義의 概念을 나타내는 경우에는 待遇表現이라는 用語를 使用하고, 狹義의 概念을 나타내는 경우에 敬語라는 用語를 使用하는 것이 一般的임을 알 수 있으며, 分類体系에 있어서 韓国語의 敬語는 尊待對象爲主의 体系이고, 日本語의 敬語는 尊待方法爲主의 体系이나, 分類의 内容面에 있어서는 主体敬語와 尊敬語, 客体敬語와 謙讓語, 聽者敬語와 丁寧語라는 一対一의 對應關係가 成立하여 基本体系面에서 兩國語의 敬語는 매우 類似할 뿐만 아니라 共通性을 보이는 點이 많음을 알 수 있다。

또한, 表現形式에 있어서 韓国語의 主体敬語와 客体敬語는 日本語의 尊敬語와 謙讓語에 비해 比較的 간단하나, 聽者敬語의 경우는 丁寧語보다 複雑한 樣相을 띠고 있으며, 漢語에 의한 敬意의 體言은 몇몇 例外

的인 경우도 있으나, 兩國語에 同一한 語彙가 많고, 用法面에 있어서도 兩國語의 敬語는 類似點이 많으나, 韓國語에 비해 日本語가 相對的인 性格이 짙음을 알 수 있다.

I.はじめに

敬語法は韓・日兩國語の一番著しい共通の特質の一つとして至って特異な体系を成している。ほとんど同じ系統に属する他のアルタイ諸語の中でも類例のない複雑な敬語法が韓・日兩國語に特に発達している。この敬語法こそ韓國語と日本語が世界の他の言語と區別される一番際立った特徴であるというべきものであろう。

一般的に敬語の性格の上から、韓國語は絶対敬語であり、日本語は相対敬語であると認識されてきた。大方の性格から見てそのような傾向が強いのは事実であるが、韓國語の場合も絶対的な面を持ていながら相対的な面が少なくないので、必ずしも絶対敬語または相対敬語と区分させるのはできないと思われる。

敬語の概念においても韓國語の場合は後述することのように広義の敬語、即ち話し手・聞き手・話題の人物の間の上下親疎等の関係に基づいて変わる言語の形式のすべてを意味する場合が多く(これは日本語の待遇表現という用語に該当する)、日本語の場合は狭義の敬語、即ち目上の人また、関係の浅い人に対する特定の物言いを意味するのが一般的である。

このように韓國語と日本語に敬語があるという点においては一致するが、体系と内容においてはおのおの違ったそれなりの様相を示している。

本稿では兩國語にある敬語法の特質を分類面から比較対照してその類似点と相異点を考察しようと思う。ただし、比較対照の対象はここでは兩國語共に現代語に限る。

II. 敬語の概念と分類

1. 敬語の概念

敬語とは何かについては改めて論ずるまでもないことと思われるが、兩國語における一般的に取用する敬語の概念上に少し違いがありそうなので、この問題について言及して置いたほうがよいようである。

敬語という言葉の意味を辞典で調べて見ると、韓國語の場合は「恭敬하는 뜻을 나타내어 하는 말, 또는 다른 말」⁽¹⁾と出ているし、日本語の場合は「聞き手や話の中に出てくる人に対する話し手の敬意を表わす言葉」と出ている。⁽²⁾兩國語共に「相手に敬意を表わす言葉」というのが辞典によく表わされている。

ところが、問題点になるのは辞典に出ている敬語の概念と実際に使われる敬語の概念とは少し差異があるからである。つまり、広義の敬語に解釈する場合と狭義の敬語に解釈する場合がそれである。ここで広義の敬語というのは話し手・聞き手・話題の人物の間の上下親疎等の関係に基づいて変わる言語の形式のすべてをいうことであり、狭義の敬語というのは目上の人また、関係の浅い人に対する特定の物言いを言うことである。日本語の場合はただ敬語と言った時、これを広義の敬語に解釈することがたまにあるが、この場合には待遇表現という用語を用いて狭義の敬語と區別して使うのが一般的である。ただ敬語と言った時、広義の敬語・狭義の敬語という概念の中でどちらを意味するのかという混同を避けるために敬語と待遇表現という用語を區別して使っているのが一般的であるということである。つまり、一般的に敬語という時は上に述べた狭義の敬語を示すことになり、待遇表現という時は広義の敬語を示すことになる。それであるから、厳密に言えば、敬語は待遇表現の中の一部分である丁寧な言い方を差すことになり、このようになると辞典に出ている意味とも相違して使われる結果になる。

(1) 새우리말 큰사전, 三省出版社, 1981.
新明解語国辞典, 三省堂, 1983.

しかし、韓国語の場合は、日本語に反して、敬語の概念の設定の限界に多少曖昧な点がある。敬語という用語が辞典に出ている概念と異なる概念として使われる場合が表われるからである。ここで辞典に出ている概念と異なるというのは敬語を広義の概念として解釈する場合を差すのである。このようなことは李翹燮氏の「國語敬語法의 體系化問題」の次のような例でよくわかる。

「…子女들은 과연 父母에게 敬語만을 쓰는가, 그렇지 않으면 그 要因은 무엇인가, 아이들은 왜 어른들과는 달리 처음 만나는 친구에게도 敬語를 쓰지 않는가…」⁽²⁾

上に引用した部分に出る敬語という用語の概念は狭義の敬語、つまり辞典に出ている敬語の概念を示すのにちがいない。なぜならば、韓国語では子供がよく父母に対して親しみをこめて「반말」ということばを使い、子供どうしは始めて会う場合にも「반말」を使う。つまり、ここで敬語を使わないというのは「반말」を使うのを意味する。言い替えば、どうして敬語を使わないで、「반말」を使うのかということになる。それであるから、ここでは敬語ということばを、「반말」でない、敬意を払って表わすことば、つまり狭義の敬語として解釈しているのにちがいない。

ところが、実際に敬語を分類する過程では相対敬語(本稿では聴者敬語という用語を用いた)の部分で「반말(예체)」を敬語の中に含めて取り扱っている。⁽³⁾この場合の敬語の概念は確かに辞典に出ている概念でなくて、広義の概念(つまり、日本語における待遇表現の概念)として解釈されているのにちがいない。このように、敬語という用語が狭義にまたは広義に、おりおりの場合によって異なる概念として解釈されては、用語の一貫性を持つとは言えないであろう。そればかりでなく敬語という用語が広義の概念として解釈される場合は常語とか単語とかもその敬語の中に含まれてしまうので、敬語という用語自体が持っている意味とも相反する結果になる。

このような用語の混同を避けるためには、徐正洙・成著徹氏等は広義の敬語に解釈すべき場合には、狭義の敬語と区別して「待遇法」という用語を使っている。⁽⁴⁾筆者もこれと同じ立場を取りたい。敬語という概念を待遇法の一部である丁寧な言い方を差すものとして限定したいのである。用語はできるだけ明確なものが理想的であるから、敬語ということばは用語自体が意味するように、敬意を払って表わすことばとして使われるのが妥当であると思われ、対人関係によって、状況によって適当なことばを使い分ける意味としての敬語は敬語という用語よりも待遇法という用語のほうがよさそうに思われる。

2. 敬語の分類

敬語の分類に関しては両国共にいろいろな諸説が出ているが、最近のいちばん一般的な分類説は、韓国語の場合は、ある叙述の主体、つまり一つの文の主語を言語的に敬って表わす主体敬語、一つの文の主語の行為が及ぶ対象、つまり客体を言語的に敬って表わす客体敬語、聞き手を自分と対比して敬って表わす聴者敬語の三つの分類方法が行われ、⁽⁵⁾日本語の場合は、相手や第三者を敬ってという尊敬語、話し手自身または話し手側のものについて謙ってという謙讓語、及び物言いを丁寧にする丁寧語の三つに分類する方法が最も一般的に行われている。⁽⁶⁾

このように両国共に敬語を一般的に三つの種類に分けてその用法を区分している。本稿では比較対照の便宜のため、上の三つの分類をおのおの主体敬語と尊敬語・客体敬語と謙讓語・聴者敬語と丁寧語のように対比さ

(2) 李翹燮, 「國語敬語法의 體系化問題」, 國語學 2輯, p. 40. 國語學會, 1974.

(3) 前掲書, p. 57.

(4) 徐正洙, 尊待法의 研究, 一現行待遇法의 體系와 問題點—翰信文化社, 1984.

徐正洙, 現代國語待遇法研究, 語學研究, 8—2, 1972.

成著徹, 國語待遇法研究, 忠北大論文集, 4, 1970.

(5) 李翹燮氏は主体敬語・客体敬語・相対敬語の三つの分類方法を取るが、この中の相対敬語の相対という意味は相手、つまり聞き手を意味している。相対敬語という用語は絶対敬語の反対の概念としても使われるから、本稿では聴者敬語という用語を取った。

また、徐正洙氏は待遇法の分類を主体待遇・客体待遇・聴者待遇に分けているが、本稿の分類はこの基準によって区分された待遇法の中で敬語の部分だけを差すことになるわけである。

(6) 辻村敏樹氏は、敬語には話の材料となる人や物、つまり素材について語ることばと、聞き手や読み手、つまり対者に直接に敬意を表わすことばの二種類があると考えて、敬語を素材敬語と対者敬語に分けている。

せて、その用法の類似点と相異点を考察しようと思う。

Ⅲ. 主体敬語と尊敬語

主体敬語とはある叙述の主体、つまり一つの文の主語を敬って表わすことばであり、尊敬語とは相手や話題の人を敬う場合に使うことばであると述べた。この章では、韓国語の主体敬語と日本語の尊敬語は互いにどんな関係があるのかについて考えて見ることにする。両国語における普通の言い方に対して主体敬語または尊敬語があるのは用言・体言・助詞の場合である。

1. 表わし方

(1) 用言

用言に表われる敬語としては、両国語共に普通の言い方に対してそれと異なった特定の言い方をするものと普通の語形に敬語的成分を付加するものとに分けることができる。

① 特定の語を用いるもの

両国語共に特定の語形を利用して敬意を表わす語の数はあまり多くない。よく使われる種類を比較して見ると、次のようである。

〈韓国語の用言の主体敬語〉

있다→계시다, 있으시다.⁽⁷⁾

말하다→말씀하시다.

먹다→잡수시다, 드시다.

자다→주무시다.

죽다→돌아가시다.

⋮

〈日本語の用言の尊敬語〉

いる→いらっしゃる, おいでになる。

する→なさる, あそばす。

行く→いらっしゃる, おいでになる。

来る→いらっしゃる, おいでになる。

言う→おっしゃる。

見る→ご覧になる。

やる→くださる, 賜わる。

食べる→めしあがる。

着る→召す。

死ぬ→おかくれになる。

寝る→お休みになる。

⋮

② 敬語的成分をつけるもの

主体敬語の敬語的成分附加による表現方式は叙述語の語幹に主体尊待表示である先語末語尾「(으)시」を添加して表わす一つの方式しかないのに反して(母音で終る語幹につく時には頭母音「(으)」は落ちる), 尊敬語の場合は助動詞れる・られる, 接頭辞お・ご, 補助動詞なる・なさる・くださる・あそばすなどを用いた～れる・～られる, お～になる・ご～になる, お～なさる・ご～なさる, お～あそばす・ご～あそばす, お～くださる・ご～くださるなどのいろいろな形式がある。つまり, 尊敬語は主体敬語とは違って, 敬語的成分が後にも付くし前と後にも付くわけになる。たとえば, 韓国語は「쓰다」という普通語に対する主体敬語が「쓰시다」という一つ

(7) 韓国語の場合は特定の語を用いる敬語にも必ず次に述べる敬語的成分を表わす先語末語尾「시」が含まれる。

の表現しかないが、日本語は「書く」に対する敬語が書かれる・お書きになる・お書きなさる・お書きあそばすなどのようにいろいろな形式で表わされることができる。

なお、韓国語は形容詞にも上の動詞の場合と同じように先語末語尾「시」を添加して主体敬語として表わすことができるが、日本語の形容詞・形容動詞は動詞とは違って、ただ接頭辞だけを付けて敬語として表わすことができる。

以上のように用言における韓国語の主体敬語と日本語の敬語の表現形式を比べて見ると、主体敬語に比して敬語のほうがずっと複雑な様相を示している。敬意を表わす特定の単語の数も主体敬語より敬語のほうが多いし、その上に、敬語的成分附加による表現形式も主体敬語は「(으)시」を添加する一つの方式しかないのに、敬語は接頭辞と補助動詞などの結合したいろいろな方式が発達している。

(2) 体言

韓国語の主体敬語は用言の主体敬語形に呼応して体言においても主体敬語形を用いるのが普通である。しかし、主体敬語形がない場合には普通形をそのまま用いてもかまわない。敬語形がなく普通語が用いられたのであるが、その時の普通語は深層的には敬語の役割をみると見ることができる。普通語と区別された体言の主体敬語形にはいくつかの特定の語形と接頭辞・接尾辞のような敬語的成分をつけて造った成分附加形がある。

〈韓国語の体言の主体敬語〉

(名詞) 진지, 약주, 연세, 성함, 병환…

(代名詞) 二人称: 그대, 당신, 님, 어르신, …

三人称: 이 분, 이 양반, 이 어른, 그 분, 그 양반, 그 어른, 저 분, 저 양반, 저 어른, 당신…

(接頭辞) 令~: 令愛, 令息, 令夫人…

玉~玉体, 玉筆, 玉稿…

芳~: 芳名, 芳命…

高~: 高名, 高見, 高堂…

御~: 御食, 御命, 御製…

尊~: 尊堂(母), 尊父, 尊体, 尊意…

貴~: 貴夫人, 貴弟, 貴宅…

大~: 大夫人, 大兄, 大君…

(接尾辞) ~님: 아버지님, 선생님, 선생님…

~先生(님): 醫師先生(님), 金先生(님)…

~職位名(님): 金教授(님), 李博士(님), 朴社長(님)…

~氏: 金正洙氏, 朴氏, 兄氏, 妹氏…

~분: 兄弟분, 内外분, 친구분…

~其他: 金翁, 李女史, 大統領閣下, 教皇聖下…

日本語の敬語も韓国語の場合と同じように用言の敬語形に呼応して体言においても敬語形を用いる。この体言の敬語形は韓国語のようにいくつかの特定の語形と接頭辞・接尾辞のような敬語的成分をつけて造った成分附加形がある。

〈日本語の体言の敬語〉

(名詞): 思召, 仰せ, 台覧…

(代名詞) 二人称: あなた, 大兄, 貴兄, お宅さま, あなたさま, こちらさま, そちらさま…

三人称: このかた, そのかた, あのかた…

(接頭辞) お~: お考え, お各前…

ご~: ご住所, ご主人…

み~: み仏, み興…

貴~: 貴夫人, 貴社, 貴弟…

芳～：芳名，芳命…
 令～：令愛，令息，令夫人…
 大～：大兄，大君…
 尊～：尊父，尊意，尊堂(家)…
 玉～：玉稿，玉体，玉筆…
 高～：高名，高堂，高見…
 …

(接尾辞)～さま・さん：天子さま，仏さま，山本さん，兄さん…

～どの：大臣どの，太郎どの…
 ～君：川口君，山下君…
 ～うえ：父上，母上…
 ～氏：山田氏，川口氏…
 ～ご：父御，母御…
 ～がた：あなたがた，先生がた…
 ～先生：山村先生，校長先生…
 ～その他：山田翁，田中閣下…

(接頭辞～接尾辞)

お・ご～さん・さま：お嬢さん，お医者さま，ご隠居さん，ご両親さま，…

以上のように両国語の体言における主体敬語と尊敬語は非常に類似した分類を示しているばかりでなく，接頭辞によって造られた漢字造語である場合は語彙自体が同一なものも多い。ただ，特定の語形は韓国語のほうが少し多いのに比して，敬語的成分析加による語形は日本語のほうが多いのがわかる。

なお，体言に附随して主体に対する敬意をさらに強める助詞がある。韓国語の場合は主格助詞の「～이，～가」に対して「～께서」という形が用いられるが，述語が敬語形であるからと言って主格助詞が必ずしも敬語形になるとは限らない。主格助詞に敬語形を用いると敬意がさらに強められるが，普通形を用いても非文法的になる訳ではないのである。日本語の場合はよく使われないが，格助詞の「に」を用いて主語に対して敬意を払って表わすことができる。⁽⁸⁾

2. 用法

韓国語の主体敬語は話し手がある叙述の主体を言語的に敬って表わすことであるので，主体敬語の形式自体の意味はその用言の動作主に対する話し手の敬意表現である。この敬意表現は主体の行動状態を表わす叙述語ばかりでなく，主体と関連した人・事物にも表わされるし，人・事物に附随した助詞にも表わされる。つまり，叙述語の敬語形に呼応して体言・助詞にも敬語形を用いるのである。しかし，前にも述べたように体言の敬語形がない場合は普通形をそのまま使う。この場合，敬意表現の対象となれる素材の資格は年齢とか社会的地位とかによって決定される。話し手より主体が年上であるとか，年上ではないが，話し手より上司であるとかというとその主体を敬って表わすのである。たとえば，

a. 선생님께서 宅에 가신다.

のような文は主体の先生を敬って表わした場合である。主体を示すことばに「님」をつけ，⁽⁹⁾助詞も「～이」のかわりに「～께서」という形を用いて敬意を払って表現した。また，主体と関連した事物も「집」という普通語のかわりに「宅」という敬語形で表現し，用言には「가다」という普通語に対して「가시다」という敬語形を用いて表現した。このように話し手より上位者の「先生」に対する敬意表現が叙述語ばかりでなくそれと関連した事物にまで表わされるのである。

しかし，

(8) 「先生にはいかがお過ごしでございませうか。」というように主体を敬って表わすことができる。

(9) 韓国語では「先生」に「님」という接尾辞をつけて「先生님」というが，日本語では「先生」に何の接尾辞も付けないでいう。

b. 社長님께서 담배를 피우신다.

のような文では上位者の社長であるが、主体と関連した事物である「담배」という体言の敬語形がないから、この場合は普通語をそのまま用いて表現した。この時の「담배」という普通語には敬語形がないから、用いられないのであるが、そのために敬語にならない訳ではない。この場合に用いられた普通語は深層的に敬意が含まれていると見なければならない。

なお、主体敬語の主体は直接的に聞き手である場合もあるし、聞き手でない第三者である場合もある。主体が直接的に聞き手である場合に、聞き手が話し手より上位者であるとか、聞き手でない第三者の場合にも、第三者の主体が聞き手より上位である場合は問題にならないが、聞き手が第三者の主体より上位者である場合には聞き手より下位の主体に敬語を使わないことがある。言わば、主体に対する圧尊法が適用されるのである。たとえば、

c. 先生님, 金先輩가 내일 온다고 합니다.

のような文では、聞き手の「先生님」に主体の「金先輩」を敬って表わしていない。これは聞き手が第三者の主体より上位者であるから、主体の「金先輩」に対して敬語を用いらないのである。このように場合によって敬語の使用を異にするという点で韓国語の敬語も必ずしも絶対的であるとは言えないであろう。

日本語の尊敬語も上に述べた主体敬語と用法が殆ど一致する。まず、尊敬語を用いる対象は年齢とか社会的地位などによって決定され、このようにして決定された対象には話相手と話題の第三者自身ばかりでなく、その人に付属した物、その人の行為・性質・状態などにも尊敬語を用いる。例えば、

d. 先生のお考えをお話してください。

のような文を分析して見ると、「先生」は話相手自身の敬称、「お考え」は先生の付属物である「考え」の尊敬語、「お話してください」は「話してくれる」の意味の尊敬語「お話くださる」の命令形であることがわかる。しかし、「先生がたばこをお吸いになる。」のように「たばこ」という普通語をそのまま用いる場合もある。

さて、もし尊敬する対象が相手との話題に出て来た第三者である場合には、次のようになる。

e. 先生のお嬢さまはおいくつにおなりですか。

この場合、「お嬢さま」はその第三者の敬称、「おいくつ」はその人の状態の尊敬語、「おなりですか」は「なる」という行為の尊敬語で「お～だ」という成分附加形を取っている。

また、話相手が話題の第三者よりも上位者である場合には次のようになる。

f. 先生はお嬢さまにどういスポーツをさせたいとお考えですか。

これを分析すると、話相手の「先生」、話題の第三者は「お嬢さま」と、ともども敬称が使ってはいるが、「スポーツをさせたい」という部分に敬語を使っていないのは「先生」のほうが「お嬢さま」より上位者であるからである。これは韓国語の主体敬語の圧尊法というものとまったく同じことである。

以上に述べたのは韓国語の主体敬語と日本語の尊敬語の用法が殆ど一致する場合であるが、用法上非常に異なった点がある。それは身内の上位者のことを人に言う時である。例えば、

g. 아버님은 지금 안계십니다.

h. 父はいまおりません。

の場合のように、韓国語では身内の上位者のことを人に言う時も主体敬語を使うが、日本語の場合は、身内の者はいくら上位者であっても人に言う時には「お父さんはいまいらっしゃいません。」というような尊敬語を使わないという点である。このような点で、両国語の敬語を比較する場合、よく韓国語の敬語は絶対的であり、日本語の敬語は相対的であるというようである。

以上で述べたことのように、用語の定義面から見ると、韓国語の主体敬語の「ある叙述の主体」というのは日本語の尊敬語の「話相手または話題の第三者」と同じことを意味しているのがわかる。言わば、主体敬語は尊待の対象に重点を置いてつけた名称であり、尊敬語は尊待の方法に重点を置いてつけた名称であるということに

なる。⁽¹⁰⁾つまり、主体敬語と尊敬語は名称は違うが、これら自体が意味している内容は同じことなので、一対一の対応関係が成立すると見ることができる。用法上からも殆ど一致するが、身内のことを人に言う時には互いに表現を異にしている。

Ⅶ. 客体敬語と謙讓語

客体敬語とは一つの文の主語の行為が及ぶ対象、つまり客体を敬って表わすことばであり、謙讓語とは話し手が自分や自分のがわの動作をへりくだることによって間接的に相手を敬う場合に用いられることばである。韓国語の客体敬語は中世国語では主体敬語と共に活発であったが、後世に伝わって来るにしたがって漸次退化して現代国語に至っては僅かに痕跡の一部だけが残ることになったのである。したがって、今日極めて少数の語彙しか残っていない実情である。それに反して日本語の謙讓語は表現形態が韓国語の客体敬語よりずっと大いに発達しているし、また広く使われている。この章では韓国語の客体敬語と日本語の謙讓語は互いにどんな関係があるのかについて考えて見ることにする。

1. 表わし方

(1) 用言

韓国語の客体敬語は現代国語においてはあまり広く使われていない。主体敬語は主体尊待表示である先語末語尾「(으)시」が何の語幹にも自由に結合して広く使われているが、客体敬語はこの「(으)시」に該当する形態素が別になく、客体に対する尊敬を表わす次のような特定の動詞がいくつかあるばかりであるからである。

〈韓国語の用言の客体敬語〉

주다 → 드리다.

물다 → 여쭙다.

보다, 만나다 → 뵈다.

뵈시고 가다 → 모시고 가다.

⋮

したがって、このような特定の客体敬語形のない用言に対しては客体がいくら尊い人物であってもそれに対する敬意を表わすことができない。

反面、日本語の謙讓語は韓国語の客体敬語に比してずっと多様であって、表現形式が尊敬語の場合のように特定の言い方をするものと普通の語形に敬語的成分を附加するものがある。特定の言い方をするものは次のようにいくつかの語彙に限定されている。

〈日本語の用言の謙讓語〉

いる → おる

する → いたす

行く・来る → 参る

言う → 申し上げる, 申す

会う → お目にかかる

見る → 拝見する

見せる → お目にかける, ご覧にされる

やる → 差し上げる, 上げる

もらう → 頂く, 賜わる

思う → 存ずる

(10) 韓国語の主体敬語も従来には尊待の方法に重点を置いて尊敬語と称したことがあり、日本語の尊敬語も尊待の対象に重点を置いて素材敬語の上位主体語と称する説がある。

知る→存じ上げる
 食べる・飲む→ちょうだいする、頂く
 聞く→うかがう
 たずねる→うかがう、あがる
 …

また、敬語的成分附加による表現形式としては接頭辞「お・ご」と補助動詞「する・いたす・あげる・さしあげる・いただく・申す」などを用いたお～する・ご～する、お～いたす・ご～いたす、お～申す・ご～申す、お～申しあげる・ご～申しあげる、お～いただく・ご～いただくなどのようにいろいろなものがある。

以上のように用言における韓国語の客体敬語と日本語の謙讓語の表現形式を比べて見ると、客体敬語はいくつかの特定の語形しかないのに反して、謙讓語は特定の語形の数もずっと多いし、さらに敬語的成分附加による表現まであって、客体敬語よりずっと広く用いられている。

(2) 体言

韓国語の客体敬語は主体敬語の場合と同じように用言の客体敬語形に呼応して体言においても客体敬語形を使うのが普通である。もちろん、主体敬語のように敬語形がない場合には普通語をそのまま用いる。普通語と区別された体言の客体敬語形にはいくつかの特定の語形と接頭辞のような敬語的成分を付けて造った成分附加形がある。

〈韓国語の体言の客体敬語〉

(名詞) 말슴, 上書, 애미, 애미, 할머, 어멈, 女息, 子息…

(代名詞) 저, 저회…

(接頭辞) 小～: 小人, 小子, 小生…

拙～: 拙品, 拙作, 拙宅…

弊～: 弊店, 弊社…

粗～: 粗品, 粗筆…

愚～: 愚息, 愚妻, 愚見…

拝～: 拝見, 拝聴…

…

日本語の謙讓語も韓国語のように、用言の謙讓語形に呼応して体言においても謙讓語形を使うし、またその種類もいくつかの特定の語形と接頭辞・接尾辞などのような敬語的成分を付けて造った成分附加形がある。

〈日本語の体言の謙讓語〉

(名詞) せがれ, 家内…

(代名詞) わたし, わたくし…

(接頭辞) お・ご～: お話し, ご説明…

小～: 小著, 小生, 小子…

拙～: 拙宅, 拙作, 拙品…

弊～: 弊社, 弊店…

粗～: 粗品, 粗筆…

愚～: 愚妻, 愚息, 愚見…

拝～: 拝見, 拝聴…

…

(接尾辞) ～ども; 私ども…

～め; せがれめ…

～儀; 私儀…

…

以上のように両国語の体言における客体敬語と謙讓語はたいへん類似した分類を示しているし、接頭辞によって造られた漢字造語の場合は語彙自体が同一なものも多い。しかし、日本語の場合は接尾辞を付けて造っ

た謙讓表現がいくつかあるのに反して、韓国語にはそれが無い。

なお、韓国語には体言に附随して客体に対する敬意をさらに強める助詞がある。与格助詞「~에게」に対し「~께」という形がそれであるが、述語が客体敬語形であると言って、与格助詞が必ずしも「~께」という敬語形になるとは限らない。与格助詞として敬語形を用いると敬意表現がさらに強められるが普通語を用いても非文法的になる訳ではないのである。日本語にはこのようなものはない。

2. 用法

韓国語の客体敬語は話し手が一つの文の主語の行為の及ぶ対象、つまり客体を敬って表わすことばであると述べた。この客体に対する尊待は主体と対比して客体が敬われなければならないと判断される時に成り立つ。ここで、客体を敬って表わすというのは、言い替えば、主体を低め、客体を高めて表わすのを意味する。言わば、主体の謙讓と同時に客体に対する尊敬という形式によって表わされるのである。しかし、客体が省かれた時には客体に対し敬意が表わされないから、そんな時には主体の謙讓的表現だけ表わされることになる。

主体と対比して客体が敬われることができる場合は話し手の立場で見て、客体が主体と同等以上の尊い人物と認められなければならない。主体と客体が殆ど同等な尊待の対象者である場合には話し手側から遠いほうを高めて表わし、近いほうを相対的に低めて表わすのが一般的である。

- i. 동생이 아버지께 말씀드린다.
- j. 그 事件에 대하여 저부터 말씀드리겠습니다.

iの文では、客体の「아버지」が主体の「동생」より上位者と認められて客体敬語で表わされた。この表現形式を見ると、主体の「동생」の行為に対しては「말하다」という普通語の謙讓的表現である「말씀드린다」を用い、客体の「아버지」に対しては「아버님」という尊敬表現を用いた。そして、与格助詞「~에게」のかわりに「~께」という敬語形を用いた。つまり、客体敬語で主体の行為は謙讓的形態に表わされ、客体自体に対しては主体敬語のように尊敬の形態に表わされるのである。しかし、gの文のように客体が省かれている場合には主体の謙讓的な表現形態だけが表わされ、客体に対する敬意の表現は表わされないことになる。

日本語の謙讓語も韓国語の客体敬語と用法が殆ど一致する。ただし、日本語の謙讓語は「自分や自分のがわの動作をへりくだることによって間接的に相手をうやまう場合に用いられることば」という用語についての説明でもわかるように、主体または主体側の謙讓的表現が主となり、客体に対する表現は言及していない。これは客体が省かれた場合に主体の謙讓的表現だけが表わされるので、その点に重点を置いたことに思われる。しかし、客体が省かれない場合には韓国語のようにその客体に対する表現は尊敬語で表わす。また、客体に対比して主体を謙讓的表現で表わすための条件は、客体が主体より同等以上の尊い人物と認められなければならない。主体と客体が殆ど同等な尊待の対象者である場合には、話し手の立場で見て、遠いほうを高めて表わし、近いほうを相対的に低めて表わすのが一般的である。もちろん、尊敬語の場合と同じように韓国語と異なった点は人に身内のものについて言う時は尊い客体に対しても敬意の表現で表わさない。

- k. その件は私からご説明申し上げます。
- l. 妹がお医者さんに見ていただきました。
- m. 弟は父にすばらしい送り物をあげたいと言っています。

kの例文は、客体が省かれて主体の謙讓的表現だけが表わされた場合である。「私」は自称の人代名詞の謙讓語であり、「ご説明」の「ご」は、この場合謙讓語である。元来自分側の事物には「お」や「ご」を付けないが、「ご説明」の場合は、その説明が相手に及ぶので「ご」を付けるのである。⁽¹¹⁾また、「申し上げる」は「言う」の意味の謙讓語である。

lの文は客体が省かれない場合の例である。主体の「妹」に対して客体の「医者」が尊待の対象と認められて主体の行為が「見ていただく」という謙讓的な形態に表わされたし、客体の「医者」に対しては「お医者さん」という尊

(11) この場合、「ご」を付けないでもかまわない。

敬形態に表わされた。しかし、mの例文のように主体と対比して客体が尊待の対象者であると言っても、身内の者を人に言う時にはその客体に対して敬意を表わさない。

以上のことでわかるように、韓国語の客体敬語は客体が尊待の対象になるということに重点を置いて付けた名称であり、日本語の謙讓語は主体の謙讓的表現の方法に重点を置いて付けた名称である。したがって、客体敬語と謙讓語は名称は互いに異なるが、実質的な内容においては同じ範疇に属するものと考えられる。つまり、客体敬語と謙讓語も一対一の対応関係が成立するものと見ることができる。⁽¹²⁾

V. 聴者敬語と丁寧語

韓国語の聴者敬語は聞き手を自分と対比して敬って表わすことばであり、日本語の丁寧語は物語いを丁寧にすることばであると述べた。この章では、韓国語の聴者敬語と日本語の丁寧語は互いにどんな関係があるのかについて考えて見ることにする。

1. 表わし方

前に述べた韓国語の主体敬語と客体敬語は話し手の敬意の有無によって、それと統合関係にある用言が特定の形を取ったり取らなかったりするという、言わば文の構造の内部に関わる文法的手続きであるが、ここに述べる聴者敬語はただ終結語尾の形態によって表わされるという点で前の二者とは異なっている。現在使われているこの聴者敬語の様式と等級を分ける問題についてはいろいろな説があるが、一般的に認められている説を紹介すれば、次のようである。

〈韓国語の聴者敬語の様式と等級〉⁽¹³⁾

格式体 $\left\{ \begin{array}{l} \text{합쇼체} : \sim(\text{으})\text{입니다}, \sim\text{습니다} \\ \text{하오체} : \sim(\text{으})\text{오}, \sim\text{소} \end{array} \right.$

非格式体—해요체 : \sim\text{어요}

日本語の丁寧語も韓国語の聴者敬語のように文の構造の内部に関わる文法的手続きでなくて、文全体の丁寧さのスタイルを特徴づける言語手段である。前に述べたように、尊敬語は話題の動作主体に対する直接の敬意表現、謙讓語は動作主体を低めることによる話題の動作主体に対する間接的な敬意表現という違いはあっても、いずれも文を構成する名詞節の核である名詞に該当する素材に対する、話し手の敬意の有無によってそれと統合関係にある述語動詞その他が特定の形を取ったり取らなかったりするという文の構造の内部に関する文法的手続きであるが、ここに述べる丁寧語は「～です・～ます・～でございます・～であります」という形式を取って文全体の丁寧さのスタイルを特徴づける言語手段である。⁽¹⁴⁾

〈日本語の丁寧語の様式〉

丁寧体 $\left\{ \begin{array}{l} \text{です体} : \sim\text{です} \\ \text{ます体} : \sim\text{ます} \\ \text{であります体} : \sim\text{であります} \end{array} \right.$

特別丁寧体—でございます体 : \sim\text{でございます}

即ち、日本語の丁寧語は「～です・～ます・～であります・～でございます」という形態を文末に付けて普通の「～だ・～である」の形態に比してより丁寧な言い方をする場合に使う敬語である。

(12) 韓国語の客体敬語も従来には尊待の方法に重点を置いて謙讓語と称したことがあり、日本語の謙讓語も尊待の対象に重点を置いて素材敬語の下位主体語と称する説がある。

(13) 韓国語の聴者敬語の等級は一般的には 합쇼체・해요체・하오체・하계체・해체(한말체)・해라체などのように六等級に分けている。これらの中で 하계체・해체(한말체)・해라체는前にも述べたように敬語を広義の概念として解釈する場合には敬語という範疇に含めることができるが(この場合は敬語という用語よりも待遇法という用語のほうがもっと適切である)、狭義の敬語、つまり敬意を表わす意味という、一般的に認識されている敬語の概念として解釈する場合には敬語という範疇に含めにくいから、本稿では除外させた。また、 합쇼체・하오체・해요체에該当する表現の中で本稿には代表的な形態ばかりを例に上げた。

(14) 「でございます・おります」のようにより丁寧な意味を含む特定の動詞もあるにはある。

なお、日本語の丁寧語は韓国語の場合と違って用言の丁寧な言い方に呼応して体言においても「お・ご」のような接頭辞を付けて用いることがきわめて多くなっている。これを「美化語」と言って、丁寧語の中の独立した言葉という見方もある。たとえば、「お米」「お天気」「おソース」「ご飯」「ごちそう」などの類で、これらは専ら自分の言葉を美しくするためである。したがって、「お天気」と言っても相手を上位に置くと言った働きはない。

以上のように、韓国語の聴者敬語と日本語の丁寧語の表現形式は両国語共に文の構造の内部に関わる文法的手続きでなく、文全体の丁寧さのスタイルを特徴づける言語手段であるという点で一致を示している。しかし、その用言の敬語形に呼応する体言においては丁寧語が聴者敬語より複雑な様相を示している。⁽¹⁵⁾

2. 用法

(1) 聴者敬語

韓国語の聴者敬語は聞き手を話し手と対比して敬意を表わすことばであるから、話し手の敬意は直接に聞き手に対するものとなる。話し手の聞き手に対する敬意の表現の中で格式体は主に公的な席、上下関係を確かにすべき席、見慣れないとかあまり親しくないとかいう問柄などで使われることばであり、非格式体は主に私的な席、対等な関係が主となる席、互いに親しくて休けた問柄などで使われる。これをまた等級別に分けてその用法を調べて見ると次のようである。

〈하오체〉

「하오체」の代表的な形態は「～(으)니다・～습니다」である。この中で「～(으)니다」は用言の語幹の末音が母音で終わる場合に用いられ、「～습니다」は子音で終わる場合に用いられる。⁽¹⁶⁾

この「하오체」は話し手が上下関係とか親疎関係などに照らして聞き手を最高に高めようとする時に使われる。もっと具体的に説明すると、(i)子供が大人に、若者が年寄りに、子が父母に、弟子が師に、下級者が上級者になどのように上下の格差が大きい場合、(ii)見知らぬ問柄、親しくない仲間、異性の関係などのように親しくない大人どうしの場合、(iii)公務上の対話、会議席上、大衆に対する演説や放送などのように公的な席等の場合に使われる。特に(ii)(iii)の場合は上下関係と直接的な関連がない状況であるということに特色がある。

〈하오체〉

「하오체」の代表的な形態は「～(으)오・～소」である。この中で「～(으)오」は用言の語幹末音が母音で終わる場合に用いられ、「～소」は子音で終わる場合に用いられる。

この「하오체」は話相手がどれほど年を取った場合に使えるのは勿論のことであるし、話し手自分も年を取った場合に使えるため、最近には使用が相当減った感じがするが、未だ特定の状況では使われている。だいたい上位者が下位者や下位者が上位者に、高齢者が知らない若者に使うが、このような状況ではこの言い方は「하오체」に代替されるか共用される場合が多い。また、この「하오체」は相手を高めて表わす表現ではあるが、上位者には使わないのが一般的である。しかし、親類の親しい上位者とか先輩などに対しては目上の人であっても、親しみをこめて使うことがある。

〈하오체〉

「하오체」の代表的な形態は「～어요」であるが、変異形態として「～아요・～어요」などがある。この「하오체」は尊待の対象者に広く使える言い方であり、「하오체」を使うべき対象者とか「하오체」を使うべき対象者共に普く使える特徴がある。「하오체」よりは格式と丁寧さが薄らぐ反面、それほど親密感は多く感じられる敬語法である。

(15) 前から続いて「お・ご」という接頭辞が出ているが、これらが表わす意味を区分して整理すると次のようである。

- ① 尊敬語に属するもの：お顔、お車、ご自分などのように「あなたの」の意味を含んでいる。
- ② 謙讓語に属するもの：お手紙、お返事、ご説明などのように「私の」の意味で、その内容が相手に及ぶ場合に使う。
- ③ 丁寧語に属するもの：お米、お天気、ご飯などのようにそれ自体で言葉を美しくするためのものである。この場合、ことばを美しくするため、美化語を使うのはよいが、「お・ご」の付けすぎによってかえって敬語を混乱させていることもある。それで、丁寧の意味の「お・ご」は慣用的に固定している場合に使っている。

(16) 「하오체」のように用言の語幹末音が「ㅅ」子音で終わる場合には「하오체」が用いられる。

元来「해요体」は子供や婦女子が好んで使う言い方であったが、形態的に簡便であり、語感が柔らかくて親近感があり、各等級に広く使えるので、今日一部階層に局限されずに普く使われている。

(2) 丁寧語

丁寧語はていねいさの向けられる対象が、聞き手である相手に直接向けられる、つまり相手に対して用いられる形式であり、ふつうの「だ」の形式に比べてよりていねいな言い方をする場合に用いられる。これを種類別に分けてその用法を調べて見ると次のようである。

〈です・ます体〉

「です・ます体」は代表的な話し言葉の文体として広く用いられる。聞き手に対する敬意が込められる場合もあるが、多くの場合敬意とはかかわりなく、幾分改まった丁寧な言い方として用いられている。

「です」は助動詞「だ」が接続するものにすべて接続するほか、形容詞、及び、助動詞「ない・たい・らしい」の終止形に接続して、丁寧な断定を表わす場合に用いられる。また、「ます」は動詞や動詞型の活用形をもつ助動詞の連用形に付いて丁寧に言う意味を表わす場合に用いられる。この場合、聞き手に対する直接的な敬意は文末に用いる「ます」ではなく、いわゆる尊敬語・謙讓語によって表わされる。「です・ます体」は社会的日常会話で、相互に人格を尊重し合う態度、あるいは、社会的・公的な会話であると意識されている。「です・ます体」を中心とする丁寧体の発達・普及は近現代の敬語の特徴的事実であり、「だ・である体」で記事・論文・報告などの一般文章が書かれるようになったことと表裏をなすことと見られる。

〈でございます体〉

「でございます体」は「です」よりもっと丁寧な気持を込めていう場合に用いられる。したがって、一般的に「です」が用いられるところにそのまま「でございます」を用いることができる。⁽¹⁷⁾

待遇文体上、「でございます体」を特に御丁寧体とも言う。

〈であります体〉

「であります体」は「である」よりもっと丁寧な気持を込めて表わす場合に用いられる。これは現代の講義・演説などのなかで発達してきたが、既に今日ではやや堅い表現と意識されるようである。

以上のことでわかるように、韓国語の聴者敬語は尊待の対象に重点を置いて付けた名称であり、日本語の丁寧語は尊待の方法に重点を置いて付けた名称であるが、いずれも文のスタイルを決定する働きをし、直接に聞き手に対して敬意を表わす敬語であるという点から見れば、本質的な面で脈絡を共にするものと考えられる。したがって、これらもやはり一対一の対応関係が成立するものと見ることができる。⁽¹⁸⁾

Ⅵ. おわりに

以上、韓・日両国語の現代敬語を分類面から比較対照して見た。韓国語の敬語の分類体系は尊待の対象を主とする体系であり、日本語の敬語の分類体系は尊待の方法を主とする体系であるが、分類の内容面においては主体敬語と尊敬語・客体敬語と謙讓語・聴者敬語と丁寧語という一対一の対応関係が成り立って基本体系面から両国語の敬語は非常に類似するばかりでなく、共通性を示す点が多いのがわかる。

表現形式においては韓国語の主体敬語と客体敬語は日本語の尊敬語と謙讓語に比して比較的簡単であるが、聴者敬語の場合は丁寧語より複雑な様相を示しており、漢語による敬意の体言は(いくつかの例外的なこともあるが)両国に同一の語彙が多い。

用法面においても両国語の敬語は類似点が多いが、韓国語に比して日本語のほうが相対的な性格が強いと言えよう。

(17) ただし、「でございます」が形容詞に付く場合には形容詞の音便現象が起る。

(18) 韓国語の聴者敬語も従来には尊待の方法に重点を置いて恭遜語と称したこととあり、日本語の丁寧語も尊待の対象に重点を置いて対者敬語と称する説がある。

最後に附言して置きたいことは敬語という用語の概念に関するものである。韓国語も日本語のように敬語という用語の概念を狭義の敬語、つまり敬って表わすことばという辞典に出ている意味の敬語の概念に限り、広義の敬語、つまり包括的な人間関係に対応する言語表現の諸手段という概念で使われる場合には待遇法(もう一部の学者はこの用語を使っている)という用語を使って一般化させるのが概念の混同を避けるため、便利であろうと思われる。

参 考 文 献

- 高永根, 現代國語의 尊卑法에 對한 研究, 語学研究, 10—2, 1974.
 南基心, 國語尊待法의 機能, 人文科学, 45輯, 1981.
 徐正洙, 尊待法의 研究, 翰信文化社, 1984.
 ———, 現代國語 待遇法 研究, 語学研究, 8—2, 1972.
 成耆徹, 國語 待遇法 研究, 忠北大論文集4, 1970.
 申琦澈・申啓澈, 새 우리말 큰 사전, 三省出版社, 1981.
 李翊燮, 國語敬語法의 体系化 問題, 國語學 2, 1974.
 李翊燮・任洪彬, 國語文法論, 学研社, 1984.
 이정민, 韓國語 敬語体系의 諸問題, 韓國人과 韓國文化, 심성당, 1981.
 崔鉉培, 우리말본, 正音社, 1980.
 梅田博之, 朝鮮語における敬語, 岩波講座, 日本語 4, 1977.
 奥山益朗, 現代敬語読本, ぎょうせい, 1976.
 金田一京助, 日本の敬語, 角川書店, 1959.
 金田一京助外三人, 新明解國語辞典, 三省堂, 1983.
 國語学会編, 國語学大辞典, 東京堂出版, 1981.
 国立國語研究所, 敬語と敬語意識, 秀英出版, 1957.
 辻村敏樹, 現代の敬語, 共文社, 1973.
 ———, 現代語—敬語, 講座日本語教育第一分冊, 早稲田大学語学研究所, 1976.
 日本語教育学会編, 日本語教育事典, 大修館書店, 1982.
 韓美卿, 韓國語の敬語の用法, 講座日本語学 12, 明治書院, 1982.
 文化庁, 待遇表現, 大蔵省印刷局, 1980.
 宮地裕, 待遇表現, 日本語と日本語教育, 一文字・表現編一, 国立國語研究所, 1976.